

湧別町文化財調査報告書 第1集

北海道指定史跡
シブノツナイ 竪穴住居跡
発掘調査報告 1

史跡内容確認のための調査

2019. 3

湧別町教育委員会

湧別町文化財調査報告書 第1集

北海道指定史跡
シブノツナイ 竪穴住居跡
発掘調査報告 1

史跡内容確認のための調査

2019. 3

湧別町教育委員会

口絵1



1 シブノツナイ竪穴住居跡 空撮 東から



2 シブノツナイ竪穴住居跡とトレンチ7 空撮 西から

口絵 2



1 トレンチ7 土層断面 西壁



2 トレンチ8と隣接する竪穴住居跡の窪み 北西から

序 文

北海道の東北部に位置する湧別町は、オホーツク海に面すると共に日本最大の汽水湖であるサロマ湖を抱え、北大雪山系に水源をもつ湧別川が町の中心部を流れるなど、豊かな自然に恵まれた町であります。

自然だけでなく、石刃鎌文化の遺跡として考古学会に広く知られる湧別市川遺跡や、オホーツク文化を象徴する牙製彫刻が出土した川西オホーツク遺跡、北海道指定史跡ともなっているシブノツナイ堅穴住居跡などが所在するなど、本町は先史時代の遺跡が数多く残された遺跡の町でもあります。

シブノツナイ堅穴住居跡は昭和41年に行われた調査の成果などから、昭和42年に北海道指定史跡となりました。その後、平成26～29年の4年間、北海道教育委員会が実施する重要遺跡確認調査の対象となり、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターによって測量調査と発掘調査が行われました。その成果を踏まえ、地域の歩みを語るうえで欠かせない町の重要な財産であるこの史跡を後世にしっかり伝承すると共に、遺跡の情報発信や学習活動の教材として活用を進めるため、平成30年度からは湧別町教育委員会として調査を実施しました。今年度の発掘調査の面積は小規模なものでしたが、史跡内における当時の生活痕跡の広がりが確認できるなど、新しい発見がありました。また、今後の調査計画を立案するうえでの情報も整理できるなど、良い成果が得られました。

本書は平成30年度の調査記録をまとめたものです。調査成果が本町における文化財保護行政だけでなく、北海道の先史文化研究にいささかでもお役に立てれば幸いです。また、北海道指定から半世紀が経過した本年、報告書の刊行を通じて改めてシブノツナイ堅穴住居跡の情報が地域の方々に広まり、親しまれ、活用されることを願っております。

最後に、調査にご協力くださった諸先生方をはじめとする各位に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

平成31年3月20日

湧別町教育委員会

教育長 阿 部 勉

例 言

1. 本書は平成30年度に湧別町教育委員会が実施した、北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の編集・執筆・写真撮影・写真図版作成は湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館 JRY・郷土館の林勇介が担当した。
3. 地形測量図、竪穴・遺物分布図などは挿図ごとの任意縮尺とし、各図にスケールを配置した。
4. 掲載遺物の挿図縮尺は土器・石器を1：2、写真図版は土器・石器・礫を約1：2とした。
5. 調査の記録及び出土資料は、湧別町教育委員会で保管する。
6. 土層の色調表記は、日本色研事業株式会社刊行の『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編1967、33版2010年）による。
7. 基準点測量及びトータルステーションシステム・遺跡管理システムなどの測量機材の借用、測量機材操作指導については鞍シン技術コンサルに委託した。またデータ入力作業などについて協力を得た。
8. 発掘調査・整理報告にあたり、下記の諸機関及び個人から、ご指導・ご協力をいただいた。（順不同・敬称略）

北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課、公益財団法人北海道埋蔵文化財センター、湧別町農業協同組合、株式会社カリヤ

熊木俊朗、天野哲也、澤井玄、高瀬克範、稻田光明、西脇対名夫、赤井文人、内田和典、長沼孝、田口尚、中山昭大、坂本尚史、柳瀬由佳、吉田裕史洋、氏江敏文、松田功、武田修、瀬川拓郎、松村倫文、瀬下直人、熊谷誠、佐野恭平、佐藤和利、高田絵美理、森久大、太田敏量、高島孝宗、八重柏誠、松田宏介、五十嵐祐介、布施和洋

目 次

口絵

序文

例言

目次

1. 調査の概要	1
(1) 調査要項	1
(2) 調査体制	1
(3) 調査にいたる経緯	1
(4) 過去の調査	2
(5) 調査の目的	3
2. 遺跡の位置と環境	4
(1) 湧別町の遺跡	4
(2) シブノツナイ竪穴住居群の立地	7
3. 調査の方法	9
(1) 調査区	9
(2) 発掘調査と記録	9
(3) 検土杖調査	12
4. 調査の成果	14
(1) 発掘調査	14
(2) 検土杖調査	21
(3) 普及活動	22
5. まとめと課題	23
(1) 竪穴住居群の北側平坦地の様相	23
(2) 遺跡の遺存状況	23
(3) 今後の調査課題	24
引用・参考文献	25
写真図版	27
報告書抄録	35

挿図目次

図1 湧別町埋蔵文化財包蔵地分布図	5
図2 シブノツナイ竪穴住居群位置図	6
図3 基準点・測量基準杭の位置	10
図4 竪穴住居跡分布範囲と周辺の地形	10
図5 竪穴分布状況と植生境界線	13
図6 トレンチ配置図	14
図7 トレンチ7 平面図・土層断面図	15
図8 トレンチ8 平面図・土層断面図	17
図9 発掘調査出土遺物	18
図10 検土杖調査成果	21

表目次

表1 基準点・測量基準杭座標	11
表2 発掘調査出土遺物集計	20
表3 発掘調査出土遺物掲載一覧	20

写真図版目次

口絵1	1	シブノツナイ竪穴住居跡
	2	シブノツナイ竪穴住居跡とトレンチ7
口絵2	1	トレンチ7 土層断面 西壁
	2	トレンチ8と隣接する竪穴住居跡の窪み
図版1	1	トレンチ7・8 遠景
	2	トレンチ7 II層遺物出土状況
図版2	1	トレンチ7 II層遺物出土状況
	2	トレンチ7 作業風景
	3	トレンチ7 完堀
図版3	1	トレンチ7 土層断面 西壁
	2	トレンチ7 土層断面 南壁
図版4	1	トレンチ8 a層遺物出土状況
	2	トレンチ8 b層検出面
	3	トレンチ8 II層遺物出土状況
	4	トレンチ8 作業風景
	5	トレンチ8 作業風景
図版5	1	トレンチ8 II層完堀
	2	トレンチ8 土層断面と隣接する竪穴住居跡の窪み
図版6	1	トレンチ8 土層断面 南壁中央付近
	2	トレンチ8 土層断面 西壁
	3	トレンチ8 土層断面 東壁
図版7		発掘調査出土遺物
図版8	1	トレンチ7 埋め戻し完了
	2	トレンチ8 埋め戻し完了
	3	検土杖調査風景
	4	検土杖調査
	5	検土杖調査
	6	発掘調査の見学対応
	7	発掘調査の見学対応

1. 調査の概要

(1) 調査要項

調査対象	湧別町シブノツナイ竪穴住居群 (I-21-35) 北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」(昭和42年3月17日指定)
所在地	紋別郡湧別町川西 499-1・2, 502-1・2, 503, 714, 717～720, 722-1～3, 930番地
対象面積	139,486㎡
調査面積	12.42㎡ (内、検土杖調査2.42㎡)
調査期間	平成30年7月10日～7月28日 (発掘調査) 平成30年8月5日～11月1日 (検土杖調査)
整理期間	平成30年7月29日～平成31年2月28日

(2) 調査体制

調査主体者	湧別町教育委員会 教育長 阿部 勉
調査事務局	湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館 JRY・郷土館 館長 田中 仁 副館長 中島 一之 管理係 中原 明生
調査担当者	ふるさと館 JRY・郷土館 学芸係主任 林 勇介
調査作業員	菊地 俊文、野上 弘幸
整理作業員	東 あずさ、兼田 夕紀、小嶋 尚子

(3) 調査にいたる経緯

北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」は、平成26～29年度において北海道教育委員会（以下、道教委）が実施する重要遺跡確認調査の対象となり、北海道立埋蔵文化財センター指定管理者公益財団法人北海道埋蔵文化財センター（以下、道埋文）によって測量調査・発掘調査が行われた。その成果である報告書において、将来的な調査の課題が挙げられた。

また、道教委は平成28・29年度に「北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会」（以下、懇談会）を開催している。各年度3回開催された懇談会の内、計4度シブノツナイ竪穴住居跡に話題が及び、道埋文による調査状況の報告や出席者による意見交換が行われた。平成28年度の第2回懇談会は湧別町を会場に9月15日に開催され、シブノツナイ竪穴住居跡の現地視察も行われ、史跡の保全について意見交換が行われた。

以上のように、重要遺跡確認調査における道教委・道埋文・湧別町教育委員会（以下、町教委）の協議や懇談会において、町教委が主体となった長期的な調査が行われることが

提案されてきた。そのような状況を踏まえ、町教委として主体的にシブノツナイ竪穴住居跡の保護を進める必要があるとの結論に至り、平成30年度からは道埋文の調査成果を踏まえたうえで発掘調査を実施することとなった。

(4) 過去の調査

シブノツナイ竪穴住居群は昭和20年代には地域の郷土史研究家によりその存在が知られていたが、昭和30年代から研究者が訪れるようになり、調査が行われてきた。昨年度まで道埋文の調査を含め、発掘調査は3度行われている。その概要は次のとおりである。

① 昭和38年の調査

初めて発掘調査が行われたのは昭和38年のことで、網走市立郷土博物館の米村哲英氏によって行われた。竪穴住居跡3か所が発掘され、それぞれA竪穴、B竪穴、C竪穴と呼ばれた。それらがカマドを有していたこと、擦文土器が出土したことなどから、シブノツナイ竪穴住居群が擦文文化の遺跡として知られることとなった。出土資料は網走市で保管されている（米村1963）。

② 昭和41年の調査

2度目の調査は湧別町によるもので、北海道文化財専門委員であった北海道大学教授の大場利夫氏を発掘担当者として実施した。この調査では測量調査も行なわれ、竪穴住居跡の数が655か所であることが確認された。発掘調査は238号竪穴、318号竪穴の2か所で行われ、それぞれ擦文土器が出土すると共に、カマドも確認されたことから擦文文化の住居跡と報告された（大場1966）。

調査翌年の昭和42年3月17日、シブノツナイ竪穴住居群は北海道指定史跡に指定された。概要報告書によれば、発掘調査によって出土した資料は湧別町公民館で保管されているはずであるが、現在はその存在が確認できない。公民館は昭和47年に火災に遭っており、その際に不幸にも失われてしまったと考えられる。

③ 平成26～29年の調査

道教委が実施する重要遺跡確認調査の対象遺跡となり、平成26～29年の間、各種調査が行われた。初年度の平成26年は現地確認及び道指定関係文書の確認や、町教委と今後の調査についての打ち合わせが行なわれた。平成27・28年は竪穴住居跡の分布範囲を確認するための測量調査が中心に行われ、竪穴住居跡の数及び分布状況、地形測量が完了した。

調査最終年の平成29年には測量調査に加え、発掘調査が行なわれた。測量調査では、竪穴住居跡の詳細測量として平面形状の細部や堀上げ土の投げ込み状況などの記録が行なわれた他、竪穴住居跡の数が530か所であることが結論付けられた。昭和41年の調査

と比べると竪穴住居跡の数が大幅に減ったことになるが、理由は破壊による消失ではない。そのことは昭和41年調査に際し町教委が作成した文書『シブノツナイ遺跡発掘調査顛末』の記載内容が根拠となっている。文書によると竪穴住居跡数の内訳について「町営牧野内515個、牧場入口107個、伊藤務住宅裏林内43個 計665個」と記載されており、それぞれ現在のシブノツナイ竪穴住居跡、川西2遺跡、川西オホーツク遺跡に該当すると考えられた。結果として、現在のシブノツナイ竪穴住居跡における竪穴住居跡の数は530か所と整理されることとなった。

発掘調査では1×5mのトレンチが6か所設定された。6か所全て竪穴住居群の北側に広がる平坦地に設定され、内2か所で遺物が確認された。石器では石鎌・スクレイパー・石核などがまとまって確認され、その場所から細片を主体とした黒曜石製の剥片も集中的に確認されたため、石器製作跡があったと推測された。土器では後北C₂-D式土器の破片が出土しており、北側平坦地が使用された時期の特定が可能となった。他4か所のトレンチでは人為的に攪乱・客土された土層が確認され、広範囲にわたって竪穴住居群北西側の低湿度部が埋め立てられている可能性が指摘された。その他、現地状況の記録として竪穴住居跡が個別撮影されたこと、ドローンによる空撮が行なわれたことも大きな成果である。

測量・発掘調査以外には関連資料調査が実施された。内容は大きく2点あり、1つは道指定関係文書等のデジタル化、もう1つは湧別町郷土館に収蔵されていた土器・石器で「シブノツナイ」などの注記が見られる資料の図化・写真撮影が行われたことである。道指定関係文書等のデジタル化はその成果物が湧別町教育委員会に提供され、保管を行っている。図化等された資料についても作業後には湧別町に返却され、湧別町教育委員会が保管している。

(5) 調査の目的

調査実施にあたり、町として遺跡の正確な範囲や年代を明確にするなど内容詳細を把握し、今後の積極的な史跡保護及び活用を進めることを方針とした。

その方針のもと、本年は2つの課題を設定し明らかにすることを目的とした。1点目は、竪穴住居群の北側平坦地における未確認竪穴住居跡の有無を確認すること。2点目は、竪穴住居群の北側平坦地で認められる造成の範囲について、より正確な状況を把握することである。目的達成のための具体的な方法及び成果については、それぞれの項目において記載する。

2. 遺跡の位置と環境

(1) 湧別町の遺跡

湧別町はオホーツク海に北面し、東はサロマ湖をもって佐呂間町と北見市（常呂町）、西はシブノツナイ川をもって紋別市、南は遠軽町と接している。市街地が形成されている平野部はその中央を流れる湧別川を中心に発展してきた。湧別川は裏大雪山系の山並みの一つである天狗岳付近に水源を発し、北東に流れをとりながら山間を抜け遠軽に至る。そこで生田原川と合流し川幅を広げ、流れの方向を若干北に変え、湧別の町を貫流しオホーツク海に注ぎこんでいる。オホーツクの川に注ぎこむ河川としては、常呂川に次いで大きい。上流域である遠軽町白滝市街地の北方8 km 地点には国内最大規模の黒曜石原産地である赤石山があり、その一部は湧別川を河口まで流れ、それを素材とした石器が町内で広く確認される。

町内には旧石器時代からアイヌ文化期まで幅広い年代の遺跡が確認されており、その数は現在56か所となっている（図1）。それらは道教委・町教委が管理する包蔵地カードに情報が記載されている他、北海道教育委員会文化財・博物館課のホームページにある『北の遺跡案内』でも確認できる（http://www2.wagamachi-guide.com/hokkai_bunka/、平成30年10月31日現在）。

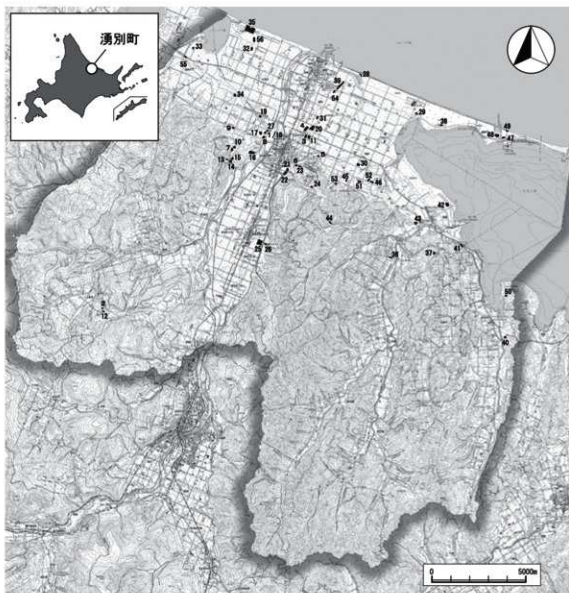
遺跡の分布状況を見てみると、町中心部を貫流する湧別川の兩岸で多く確認されており、特に河口部から8 km 上流までの範囲の河岸段丘上に集中している。湧別川右岸では、ヌッポコマナイ遺跡（登載番号6、以下番号のみ記載）から湧別市川遺跡（39）、左岸では旭遺跡（1）からシブノツナイ竪穴住居群（35）が段丘崖に沿って分布している。標高を見るとそれぞれの段丘面で最もオホーツク海に近いシブノツナイ竪穴住居群と湧別市川遺跡は共に標高4～5 m に立地している。

町の東部ではサロマ湖に注ぐ芭露川と計呂地川の下流域で遺跡が確認されている。その中・上流域でも、地域住民から昔は遺物が確認できたという声を聞くことができるため、今後分布調査を進めることで新たに遺跡を確認できる可能性がある。サロマ湖北岸の登榮床地区では、その台地の所々に丁寧竪穴群（29）や登榮床3遺跡（48）など竪穴住居跡を有する遺跡が分布している。湧別川左岸で標高25mから50m 地点、湧別川を望める位置には湧別川左岸チャシ（16）などのアイヌ文化期の遺跡も確認されている。

本年調査を行ったシブノツナイ竪穴住居群以外にも、これまで湧別町内では発掘調査が行われてきた。ここで主なものを紹介する。

旧石器時代の遺跡では、昭和30年に北海道大学の大場利夫氏らによって上富美遺跡（2）が発掘調査された。粘土層中から剥片・石刃が発見されたことや、その形態から縄文文化以前の遺跡と考えられ、現在のところ湧別町で最も古い遺跡と位置づけられている。

縄文文化の遺跡では、過去数度にわたって調査が行われてきた湧別遺跡、通称湧別市川遺跡がある。昭和30年に大場利夫氏が郷土史研究家であった小川市十氏の採集資料を実



1 旭道跡	15 礼富美3道跡	29 丁寧塚穴群	43 B R-O 4道跡
2 上富美道跡	16 湧別川左岸チャシ	30 福島団体道跡	44 B R-O 5道跡
3 二区高台道跡	17 旭3道跡	31 東二線道跡	45 福島団体2道跡
4 五の三道跡	18 湧別川左岸2チャシ	32 川西オホーツク道跡	46 福島団体3道跡
5 五鹿山道跡	19 旭4道跡	33 シブツツナイ道跡	47 登栄床2道跡
6 ヌッポコマナイ道跡	20 五の三3道跡	34 川西道跡	48 登栄床3道跡
7 旭2道跡	21 五の一道跡	35 シブツツナイ塚穴住居群	49 登栄床4道跡
8 姉崎チャシ跡	22 五の一2道跡	36 巴露道跡	50 内山道跡
9 上栄道跡	23 ヌッポコマナイ2道跡	37 キナウシ道跡	51 福島団体4道跡
10 旭1道跡	24 五の二道跡	38 登栄床道跡	52 福島団体5道跡
11 五の三2道跡	25 屯田道跡	39 湧別道跡	53 福島団体6道跡
12 上富美今井道跡	26 屯田2道跡	40 B R-O 1道跡	54 東三線道跡
13 礼富美1道跡	27 旭5道跡	41 二軒橋(BR-02)道跡	55 シブツツナイ2道跡
14 礼富美2道跡	28 ポン沼道跡	42 B R-O 3道跡	56 川西2道跡

図1 湧別町埋蔵文化財包蔵地分布図(1:200,000)

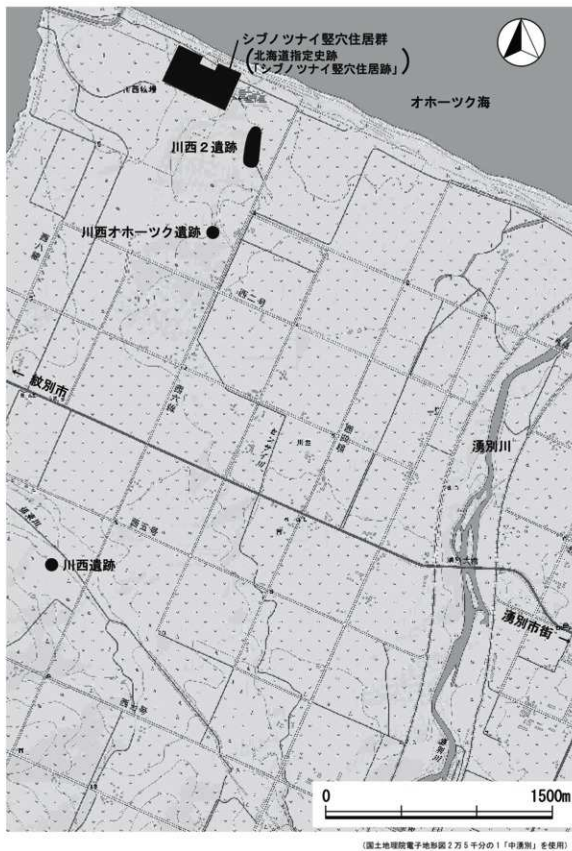


図2 シブノツナイ竪穴住居群位置図 (1 : 25,000)

見し、昭和31年に学術発掘を行ったのが最初の調査である。昭和42年には北海道大学文学部北方文化研究施設による調査として大場利夫氏により再度調査が行なわれた。成果として石刃礫石器群の出土と共に、不整隅丸方形の竪穴住居や積石を伴う浅い皿状のピットなどの遺構群が検出されている。

昭和47年には湧別市川道遺跡調査団・町教委による緊急発掘調査が、木村英明氏を調査担当者にして実施された。遺跡の中央部を南北に縦断する排水路設置工事に伴う発掘調査であった。石刃礫石器群に伴い東釧路Ⅱ式土器が出土した他、周辺地域も含めた地質学的調査と花粉分析調査が行なわれ、地形発達史や古環境の復元が試みられるなどの成果があげられた。昭和57年から3年間、昭和47年の調査区から南西に300m離れた地点で発掘調査が行なわれた。草地改良事業に伴う緊急調査で、町教委が木村英明氏を調査担当者として実施した。この調査でも石刃礫石器群が確認されると共に、石製装飾品が出土している。

オホーツク文化の遺跡では川西オホーツク遺跡(32)で2度に渡り発掘調査が行われている。最初は昭和35年に米村喜男衛氏によって行われたもので、竪穴住居跡から牙賀海獣・クマの彫刻が出土している。しかし当時、その出土状況・位置が図面等で報告されなかった。そのため、その正確な位置を確認することを目的の一つとし、北方民族博物館によって平成3年に発掘調査が行われ、出土した竪穴住居跡が特定されている。それ以外の成果も多く、動物遺体や植物種子が出土し、湧別町のオホーツク文化を知るうえで欠かせない貴重な情報が得られることとなった。

その他、湧別町の地名が由来となった土器型式も存在する。シュブノツナイ式土器は安部三郎氏によって命名されたもので、資料が確認された地域である信部内のアイヌ語地名から命名された。節目文・刺突文が大きな特徴とされ、縄文前期に位置づけられている。標識遺跡となったのは町内のシュブノツナイ遺跡(33)であるが、町内では他に湧別市川道遺跡やシュブノツナイ2遺跡(55)の調査でも破片資料が出土している。

以上のように、湧別町は多くの遺跡が存在しているというだけでなく、各文化において特徴的な遺跡が存在していることがわかる。

(2) シブノツナイ竪穴住居群の立地

シュブノツナイ竪穴住居群は北海道紋別郡湧別町川西499-1ほか、湧別町・国・個人が所有する牧草地等に所在し、東の湧別川までは約3.5km、西のシュブノツナイ湖までは約800m、現海岸線から内陸へ150mの位置にある(図2)。川西地区はその大半がオホーツク海により形成された海岸段丘の低位段丘面及び湧別川の沖積原であり、竪穴住居群はその北西端のシュブノツナイ湖南東側に位置している。そのような地形的な特徴の中、湧別川支流のセンサイ川とシュブノツナイ湖の間にはオホーツク海に向かって標高約5mの細長い段丘が伸びており、この段丘の先端部にシュブノツナイ竪穴住居群が立地している。

竪穴住居群の北側には海岸線に沿って形成された砂丘列があり、周囲にはハマナス・ハマニク・ハマエンドウ・シロヨモギの群生が見られ、竪穴住居群の南西側にはミズナ

ラカシワを主体とする保安林が広がっている。周辺の標高4mより低い部分にはヨシやスゲ類の茂る湿地が広がり、泥炭が形成されている。シブノツナイ竪穴住居群やその西部のシブノツナイ湖にも見られる「シブノツナイ」はアイヌ語を語源としており、「ウグイのいる川」が転化したものと考えられている。

現在、竪穴住居群の町有地部分は湧別農協へ貸し出され、隣接する土地と併せて「川西牧野」として利用されている。竪穴住居群南西側には受精施設などの牧野関連施設があり、毎年5月～10月は町内の酪農家が所有する約100頭の乳牛が、農協管理の下で月に数日間竪穴住居群に放牧される。

3. 調査の方法

(1) 調査区

調査にあたり必要となる基準点と測量基準杭は、平成27～29年に道埋文の調査で設定されたものを点検測量を行ったうえで使用した。これまでに設定されたものは合計で4級基準点が7か所、測量基準杭は34か所である（図3）。いずれも株式会社シン技術コンサルにより打設されたものである。測量基準杭は調査区（グリッド）設定のためにキリの良い座標での設置を基本としているが、8か所については立ち木などの影響で測量調査が困難なものに対応するため、任意箇所に設置されている。

本調査のために新たに測量基準杭を6か所追加した。追加した杭の打設と過去の杭の点検測量は株式会社シン技術コンサルに委託した。今年度設置した杭の座標値（全て世界測地系XII系）を表のとおり示すと共に、過去に設置した杭の座標値も記載する（表1）。

測量調査杭の名称は「南北ラインー東西ライン」で表し、基準杭北東側の調査区の名称ともなっている。

(2) 発掘調査と記録

発掘調査は1×5mトレンチを基本的な発掘区とし、2か所のトレンチ（総面積10m）を堅穴住居群分布範囲の北側に広がる平坦地に配置した。トレンチ名称は昨年度に道埋文が調査した番号に続け、それぞれトレンチ7、トレンチ8とした。トレンチの設定には、調査にあたって設定した2つの調査目的を達成できることを考慮した。トレンチ7は堅穴住居群の北側平坦地における遺物分布状況が確認できる場所、トレンチ8は昨年までの道埋文の調査で指摘された「未確認堅穴」の有無が確認できる場所とした。未確認堅穴とは、昭和41年の測量図には存在が記録されているが、道埋文の調査では現地地形からその存在が窺みとして確認されなかった堅穴住居跡をいう。

トレンチ調査での掘削は表土ではエンピを使用し、遺物包含層では移植ごて等を用いて掘り進め、遺構及び遺物の検出を試みた。

遺物出土状況は写真撮影及びトータルステーションを用いた地点計測により記録した。計測したデータは日中の作業終了後ハードディスクに転送・保管し、野帳の作業記録と照合してデータに遺漏がないか確認を行った。取得データの確認・作図において使用したソフトは遺跡管理システム（株式会社シン技術コンサル）である。

地点計測は遺構・包含層から出土した概ね1.0cm以上の遺物を対象とし、トレンチ単位で連続番号を付し取り上げた。それら以外の表土出土遺物や、1.0cm未満の遺物はトレンチ・層位単位で一括して取り上げた。

最終確認面は過去の試掘調査及び昨年度の発掘調査の記録から黄褐色ローム層とし、必要に応じて深堀りや堀残しをした部分がある。堅穴住居跡等の遺構を検出した場合は確認された段階で掘削を止め、精査・記録作業を行うことを想定していたが、結果として堅穴

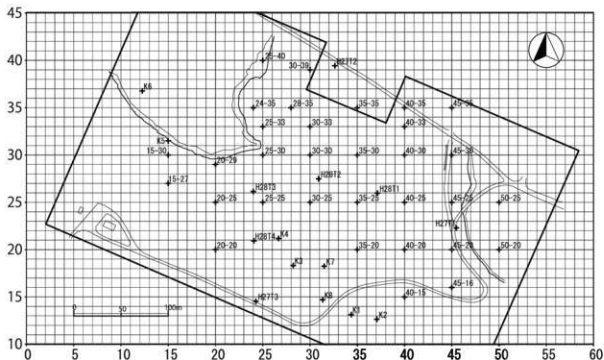


図3 基準点・測量基準杭の位置 (1 : 4000)

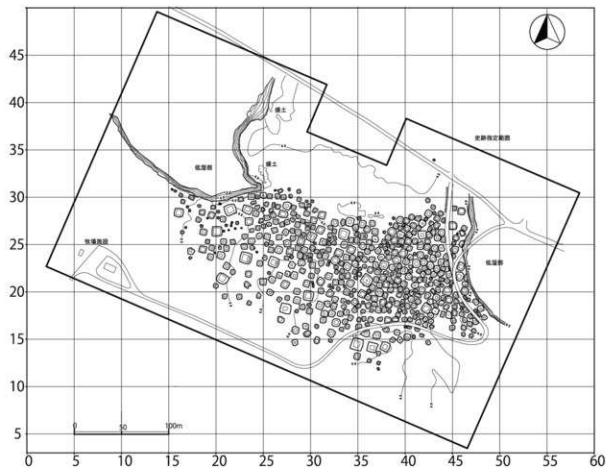


図4 竪穴住居跡分布範囲と周辺の地形 (1 : 4000)

表1 基準点・測量基準杭座標

基準点

名称	座標		打設年	備考
	X	Y		
H28T1	28059.664	105871.420	H28	4級
H28T2	28074.824	105809.115	H28	4級
H28T3	28061.430	105740.042	H28	4級
H28T4	28009.327	105740.641	H28	4級
H27T1	28023.035	105954.852	H27	3級
H27T2	28194.267	105826.322	H27	3級
H27T3	27945.352	105742.691	H27	3級

測量基準杭

名称	座標		打設年
	X	Y	
15-27	28070.000	105650.000	H28
15-30	28100.000	105650.000	H28
20-20	28000.000	105700.000	H29
20-25	28050.000	105700.000	H28
20-29	28090.000	105700.000	H28
24-35	28150.000	105740.000	H29
25-25	28050.000	105750.000	H28
25-30	28100.000	105750.000	H28
25-33	28130.000	105750.000	H29
25-40	28200.000	105750.000	H30
28-35	28150.000	105780.000	H29
30-25	28050.000	105800.000	H28
30-30	28100.000	105800.000	H28
30-33	28130.000	105800.000	H29
30-39	28190.000	105800.000	H29
35-20	28000.000	105850.000	H28
35-25	28050.000	105850.000	H28
35-30	28100.000	105850.000	H30
35-35	28150.000	105850.000	H30
40-15	27950.000	105900.000	H28

名称	座標		打設年
	X	Y	
40-20	28000.000	105900.000	H28
40-25	28050.000	105900.000	H28
40-30	28100.000	105900.000	H28
40-33	28130.000	105900.000	H29
40-35	28150.000	105900.000	H30
45-16	27960.000	105950.000	H28
45-20	28000.000	105950.000	H28
45-25	28050.000	105950.000	H28
45-30	28100.000	105950.000	H30
45-35	28150.000	105950.000	H30
50-20	28000.000	106000.000	H28
50-25	28050.000	106000.000	H28
K 1	27931.330	105843.696	H28
K 2	27926.356	105870.752	H28
K 3	27983.292	105782.248	H28
K 4	28011.837	105766.799	H28
K 5	28114.999	105650.000	H28
K 6	28167.680	105622.545	H28
K 7	27982.510	105815.044	H28
K 8	27947.004	105813.474	H28

住居跡等平面で確認できる遺構は検出されなかった。

遺物出土状況の他、手書きにより平面図及び土層断面図を作成した。作図に際し縮尺は1/20を基本とした。

記録写真はデジタルカメラを用いた。カメラはニコン製 D750にニコン製24-85mm f/2.8-4D IF を主に使用し、撮影の際は基本的に三脚（ベルボン製カルマーニュ E5300 II）を用いた。補助的な撮影としてオリンパス製 TOUGH TG-615を併用した。画像ファイル形式は Jpeg の他、RAW モードにより作成した。調査記録の作成後は、調査区の埋め戻しを行い現状に復した。

資料整理については、調査図面・写真等の整理を行うと共に、土器等の人工遺物については洗浄、注記ののち接合等を実施し、実測等により図化した。その他、代表的な遺物は写真撮影を行った。使用機材は屋外撮影時に準ずるが、レンズはニコン製60mm f2.8G EDを用いた。撮影方法はLED電球等を用いた俯瞰撮影とし、無反射ガラスのほか適宜アルミホイルを貼り付けた発泡パネル等をレフ板として使用した。これらの調査記録及び出土資料については、町教委にて保管している。

(3) 検土杖調査

昨年道埋文が実施した発掘調査の結果、堅穴住居群の北側に広がる平坦地の一部において近年実施されたと考えられる造成の痕跡が確認された（H29トレンチ1～4）。また、北側平坦地の植生を観察すると、造成されたことが確認された場所では牧草が育っている一方、遺物包含層が確認されたトレンチ周辺（H29トレンチ5・6）及び堅穴住居跡の周辺ではササやハマナスが確認された。そのため、造成範囲を推測する判断材料として現在の植生の境界を目安とすることが有効と考えられ、昨年の調査では植生境界線が平面図に記録された。結果、造成されたおよその範囲を推測することができるようになった（図5）。

今年度は造成された範囲をより明確に確認するため、検土杖調査を実施した。近年の造成は表土直下に搬入土（ローム土やシルトに礫・碎石が混じる）を確認できるため、検土杖を使用し土層堆積状況を簡易的に確認することでも十分に造成範囲の目安が得られると考えられたためである。調査地点は発掘調査同様に調査区グリッドを活用し、10m 毎の南北ラインー東西ラインの交点とした。調査に使用した検土杖はステンレス製1m 太口（柄16φ）である。

検土杖では30cm までの土層堆積状況を確認することを基本とし、状況に応じて50cm 程度まで堆積状況を確認した地点がある。

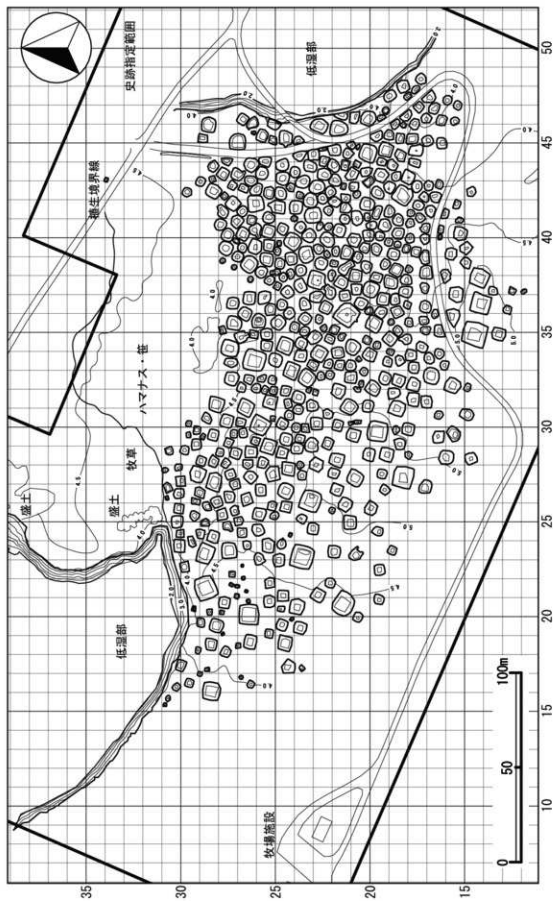


図5 竪穴分布状況と植生境界線 (1 : 2,000)

4. 調査の成果

(1) 発掘調査

トレンチ位置 (図6)

トレンチ7は竪穴住居跡分布範囲のほぼ中央部の北端から北に約60mの地点、調査区35-34から北に5m、東に1mの幅で設定した。地表面の標高は4.6m前後である。

トレンチ8は竪穴住居跡分布範囲のほぼ中央部、竪穴住居群と平坦地の境界部分の調査区35-28から北に1m、東に5mの幅で設定した。地表面の標高は4.0m前後である。

【トレンチ7】

土層 (図7)

プライマリーな自然堆積層が認められ、遺構に関連する堆積は見られなかった。Ⅰ層はササ等の植物根が密に見られ、この層を剥がすとⅡ層の黒色土が確認されると共に遺物の出土が確認された。Ⅱ層は層厚10~20cm弱の腐食土層であり、出土遺物の状況から統繩文文化期の遺物包含層と考えられる。Ⅲ層は黒褐色〜暗褐色土で、色調でⅢ・Ⅰ・Ⅲ2層に分層した。Ⅳ層は漸移層、Ⅴ層は黄褐色ロームである。トレンチ南東部で一部深堀りしたところ、Ⅵ層のにぶい黄橙色シルト粘土層を検出した。

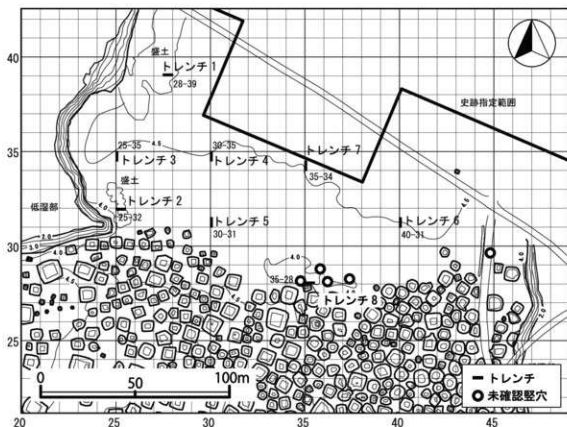
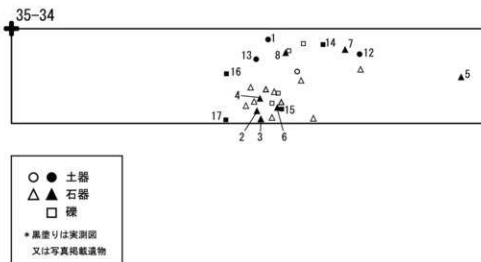
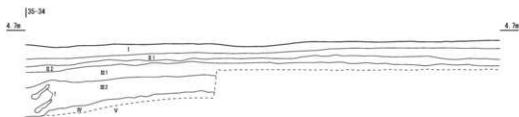


図6 トレンチ配置図 (1 : 2,000)

トレンチ7遺物出土状況



トレンチ7西壁



トレンチ7南壁



調査区	層	色調	粘性	しまり	その他の特徴
17	I	10YR2/2 黒褐色	やや弱	中	表土。ササ根多量。
	II 1	10YR1.7/1 黒色	中	中	遺物包含層。
	II 2	10YR2/3 黒褐色	中	中	漸移層。赤褐色粒φ0.1~0.5少量。
	III 1	10YR2/3 黒褐色	中	やや強	黒色粒φ0.1~1.0少量。赤褐色粒φ0.1~0.3ごく少量。
	III 2	10YR3/3 暗赤褐色	やや強	やや強	赤褐色粒φ0.1~0.3ごく少量。
	IV	2.5Y3/3 暗ナリーブ褐色	やや強	強	V層への漸移層。
	V	10YR5/6 黄褐色	強	強	ローム層。
VI	10YR6/4 にぶい黄棕色	強	強	シルト質粘土。	
I	2.5Y3/2 黒褐色	中	中	VI層をブロック状に含む。	

図7 トレンチ7平面図・土層断面図

遺物出土状況(図7、表2)

Ⅱ層の地点計測(以下、点取り)遺物点数は土器4点、石器15点、礫9点の計28点である。これらの遺物はほぼ同レベルから出土しており、共存関係にあると捉えられる。トレンチ中央部東側で石器及びチップが固まって出土し、石器製作が行われた場所の可能性がある。その他、被熱礫を含む礫片も4点確認され、集石・炉跡などの遺構との関連も考えられる。

サブトレ出土について補足説明をする。調査序盤のⅡ層掘下げのタイミングから雨天が続き、トレンチ全体を均一に掘り進めると全体が水没する状況となった。そのため、トレンチ東側に排水のためのサブトレを幅15cmで設けると共に、トレンチ南側に30×30cmの深堀りを行い、排水ポンプを設置することとした。そのため、その範囲において遺物が出土した場合、可能なものは平面位置のみ記録を行い、それ以外は層位一括で取り上げた。

遺物(図9-1~9、図版7-1~9、12~17)

土器 時期が特定出来たのは1点である。1は吊耳の一部である。燭台上の突起を有し、貼付文の断面が三角形であることから宇津内Ⅱb式土器と考えられる。貼付文に刻みは見られない。胎土には石英粒を含む。その他3点の土器片が確認されている。全て胴部であるが、無文あるいは表面が剥離しているもののため時期は不明である。12と13は胎土に石英粒が見られる。3点とも胎土や色調から1とは別個体と考えられるが、出土層位から縄文文化のものと捉えられる。

石器 点取り・一括含め、Ⅱ層から37点が出土している。石核を含み削器・搔器類が多く確認された。2~5は削器である。2は右側縁で先端から末端にかけて調整が施されている。3は末端が先頭形を呈しており、右側縁は先端から中央部にかけて、左側縁は先端部付近に調整が施されている。4は右側縁に丁寧な調整が施されている。5は広く岩屑面が残されており、角礫より剥離された素材を用いたと考えられる。調整は右側縁の中央部に施されている。6・7は搔器である。6は両側縁及び下縁に調整が施されている。7は残された岩屑面に擦痕が認められる。右側縁と下縁に調整が施されている。8は石斧である。研磨の後、敲打により整形されている。砂岩製である。9は軋礫素材の石核である。

礫 写真のみ掲載した。いずれも礫片である。石質は14・16が凝灰岩、15・17が安山岩である。掲載したものは全て被熱している。

【トレンチ8】

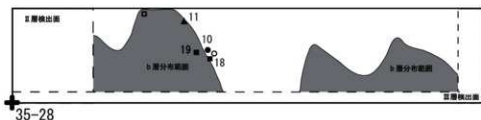
土層(図8)

トレンチ7から南に60mほど離れているが、基本的にⅠ層からⅤ層については同様の堆積状況が確認でき、同一のものと考えられる。異なる土層としてa・b層、A層、①~④層が確認された。

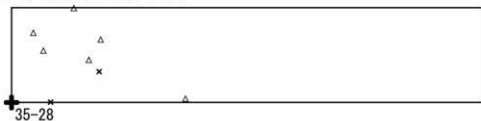
a・b層はテフラを含む土層である。その色調や粒径、擦文文化期の竪穴住居跡が形成



トレンチ 8 遺物出土状況 (a 層) 及び b 層検出範囲



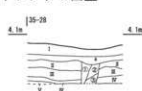
トレンチ 8 遺物出土状況 (II層)



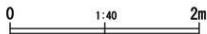
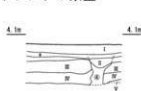
トレンチ 8 南壁



トレンチ 8 西壁



トレンチ 8 東壁



調査区	層	色調	粘性	しまり	その他の特徴
T8	I	10YR2/2	やや弱	中	表土。ササ根多量。
	II	10YR1.7/1	やや弱	中	遺物包含層。部分的に黄褐色粒(テフラと考えられる)の0.1~0.2ごく少量。
	III	10YR2/3	やや弱	中	褐色粒の0.1~0.3微量。
	IV	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	中	やや強 V層への漸移層。
	V	10YR3/6	黄褐色	やや強	やや強 ローム層。
	a	7.5YR2/2	黒褐色	やや弱	黄褐色粒の0.1~0.5多量。テフラの2次堆積と考えられる。
	b	10YR3/4	にぶい黄褐色	やや弱	黄褐色土をブロック状に多量。テフラの1次堆積と考えられる。
	A	10YR2/2	黒褐色	弱	弱 植物根由来と考えられる。
	①	7.5YR2/2	黒褐色	やや弱	やや弱 黄色粒の0.1~0.3多量。細い植物根が密。
	②	10YR2/2	黒色	弱	弱 黄色粒の0.1~0.3中量。細い植物根が密。
	③	10YR3/3	暗褐色	弱	弱 ぼろぼろ崩れやすい。細い植物根が密。
	④	10YR2/3	暗褐色	やや弱	中 黄色粒の0.1~0.5中量。黒色ブロックの0.3~0.5少量。

図8 トレンチ 8 平面図・土層断面図

トレンチ7



トレンチ8

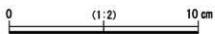


図9 発掘調査出土遺物

された時期等を考慮した結果、摩周 b (Ma-b) と考えられる。b 層は層厚 2 cm 前後であり、テフラで構成される層である。トレンチ 8 は堅穴住居群が形成されている台地上で最も標高が低い位置であり、テフラが降下した当時、風や雨によってテフラが堆積しやすい状況にあったと考えられる。また、すぐ南には堅穴住居跡が確認されることから、その堀上土によって降下してさほど時間が経過しない状態のテフラが覆われることにより、良好な堆積状況が維持されたと推測される。つまり、一次堆積のテフラと考えられる。a 層ではテフラが黒褐色土中に粒子状で確認される。この層のテフラは、前述した南側の堅穴住居跡を構築する際に、若干地表面に残されていたテフラが地表面と共に堀上土として移動したものと考えられる。つまり、二次堆積のテフラと考えられる。これらの層からは数点の遺物が出土している。テフラの平面的な広がりを見ると a 層はほぼトレンチ全体で確認されたが、b 層は南側に偏って確認された。

テフラを含む層の下層に II 層が確認され、数点の遺物が確認されている。

その他、西・東壁で柱状に確認される土層の①～④層が確認されている。西壁で見られる柱状の土層を見ると細い植物根が密に見られ、しまりも弱くぼそぼそとしているため、人為的ではない植物根由来の可能性が考えられる。東壁で見られる柱状の土層については西壁ほど周囲の層との明確な土質の違いやその境界は見られなかった。柱痕と仮定した場合の掘込み面は a 層あるいは II 層からの掘込みと考えられるが、はっきりと判断することはできなかったため、図では破線で示した。それぞれ掘下げ最終面の V 層上面においても半月状に平面形が確認されていたため、ピンボールを垂直に刺しこみ簡易的に深さを測ってみた。その結果、西側で約 40cm、東側で約 18cm と約 20cm もの差が認められた。両者を直線で結んだ 5 m の間に柱痕と考えられるものが平面的に確認されておらず、現状として西壁・東壁で見られる柱状の土層は柱痕あるいは一連の遺構として判断するには難しい状況である。しかしながら今後、調査範囲を周囲に広げて設定した場合、柱穴が確認される可能性を念頭に置きながら調査を進める必要がある。

遺物出土状況 (図 8、表 2)

a 層の点取り遺物は土器 2 点、石器 1 点、礫 3 点の計 6 点である。時期を特定できる遺物は確認されなかった。ただしトレンチ 7 の状況から II 層が統縄文文化期の包含層と考えられ、その上層であることからそれより新しい年代の遺物と捉えられる。出土位置はトレンチ中央部西側にまとまっている。

II 層の点取り遺物点数は土器 1 点、石器 6 点、炭化木材 2 点の計 9 点である。これらの遺物はほぼ同レベルから出土しており、同伴関係にあると捉えられる。時期を特定できる遺物は確認されていないが、トレンチ 7 の II 層と同一の時期と判断すると、統縄文文化期のものと考えられる。出土位置はトレンチ西側に集中している。

表2 発掘調査出土遺物集計

		トレンチ7 (33-34)			トレンチ8 (35-38)			総計
		点取り		一括 (サブトレ含む)	点取り		一括	
		II層	I層		a層	II層		
土師	続縄文	1					1	
	時期不明	3	1		2	1	7	
	計	4	1		2	1	8	
石器	削形・透器	6			1		7	
	石核			1			1	
	石斧	1					1	
	二次加工のある削片	1		1			2	
	削片	7	1	20		6	34	
	計	15	1	22	1	6	45	
礫	礫・礫片	9			3		13	
その他	炭化木材					2	2	
	現代遺物		1				1	
総計		28	3	22	6	9	68	

表3 発掘調査出土遺物掲載一覧

押戻	番号	図版	トレンチ	調査区	層位	遺物番号	遺物名	分類	石質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	加熱	備考
9	1	1	7	36-34	II	12	土師	半楕円 II b					5.0		
-	-	12	7	35-34	II	3	土師					0.9	12.8		
-	-	13	7	35-34	II	13	土師					0.5	7.9		
9	2	2	7	35-34	II	25	石器	削器	黒曜石	5.6	2.8	0.8	10.9		
9	3	3	7	35-34	II	4	石器	削器	黒曜石	4.7	2.7	0.7	7.3		
9	4	4	7	35-34	II	24	石器	削器	黒曜石	3.8	2.2	0.6	5.7		
9	5	5	7	35-34	II	1	石器	削器	黒曜石	5.2	3.5	0.9	18.9		
9	6	6	7	35-34	II	18	石器	透器	黒曜石	4.0	3.1	0.8	14.8	有	
9	7	7	7	35-34	II	5	石器	透器	黒曜石	2.1	2.9	0.8	5.6		
9	8	8	7	35-34	II	9	石器	石斧	砂岩	8.2	3.8	1.7	68.6		
9	9	9	7	35-34	II	一括	石器	石核	黒曜石	2.5	3.7	2.1	23.5		
-	-	14	7	35-34	II	6	礫	礫片	凝灰岩				78.1	有	
-	-	15	7	35-34	II	29	礫	礫片	安山岩				114.5	有	
-	-	16	7	35-34	II	14	礫	礫片	凝灰岩				196.5	有	
-	-	17	7	35-34	II	43	礫	礫片	安山岩				170.9	有	
9	10	10	8	35-28	a	5	土師						15.2		底部
9	11	11	8	35-28	a	3	石器	透器	黒曜石	3.4	3.5	1.1	11.5		
-	-	18	8	35-28	a	7	礫	礫片	凝灰岩				135.9	有	
-	-	19	8	35-28	a	4	礫	礫片	凝灰岩				221.2	有	

遺物 (図9-10・11、図版7-10・11・18・19)

土器 a層の点取り遺物は2点のみである。10は底部である。胎土には石英粒を含む。風化が著しく非常に脆く、器表面及び内面が残された部分もごく僅かであったため、底部径は不明である。もう1点は胴部である。胎土から10と同一個体と考えられる。時期は特定できなかった。Ⅱ層出土土器で図化したものはない。

石器 a層の点取り遺物は1点である。11は搔器である。円形の剥片に下縁と両側縁に丁寧な調整が施されている。Ⅱ層出土土器で図化したものはない。

礫 写真のみ掲載した。いずれも礫片である。石質は18・19が凝灰岩であり、2点とも被熱している。

(2) 検土杖調査

調査地点は121か所である(図10)。計画当初は210か所を予定していたが、調査を進める中で明らかに搬入土の範囲であると考えられた範囲は調査を省いた。その他、シブノツナイ湖へ通じる道に調査か所が重なり、検土杖が刺さりない場所があったため、実際に調査を行ったのは121か所となった。

調査の結果、20か所で搬入土が確認された。竪穴住居群の北側平坦地の内、搬入土は北西部でのみ確認され、昨年のトレンチ調査の結果とあわせ、かなり広範囲で造成が行なわ

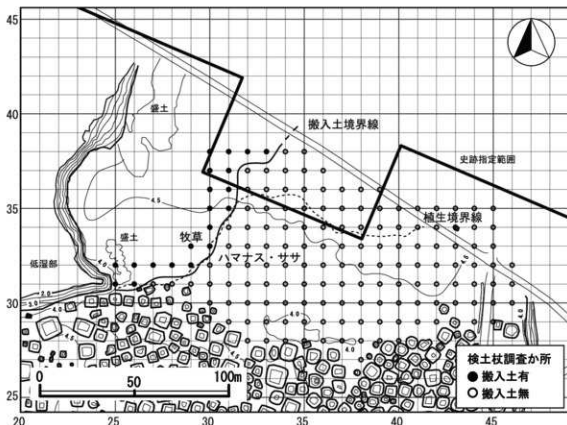


図10 検土杖調査成果 (1:2,000)

れてきたことが推測できた。搬入土が確認された範囲と旧地形が確認される範囲の境界線（以下、搬入土境界線）と昨年の測量調査で確認された植生境界線を比較すると、史跡内ではほぼ同様の範囲を示す結果となった。しかし、史跡範囲外で搬入土境界線が北側に伸びていくのに対し、植生境界線は東側に伸びていくという違いが確認された。搬入土境界線が確認できたことにより、造成された範囲がこれまで考えていたよりも若干狭くなる可能性がある。

(3) 普及活動

地域の要望に応じ、調査期間中に発掘調査の現地解説を3件実施した。2件は学校教育に関する団体で、1件は社会教育団体である。いずれの団体も、発掘調査を実施していない年も例年竪穴住居跡の見学を行っている。今年は発掘調査現場を見学してもらうことで、例年以上に地域の遺跡に興味関心を持ってもらうことができたと考えられる。今後もこのような機会を積極的に設け、地域の方々に埋蔵文化財の存在や保護の重要性を考えてもらうきっかけ作りをしていくことが重要である。

発掘調査現地見学を行った団体は次のとおりである。

1. 7月19日：湧別高校3年生「北海道学」（26人、内2人教員）
2. 7月20日：郷土館ボランティアガイド研修会（7人）
3. 7月27日：町内新赴任教職員研修（26人）

その他、11月10日に発掘調査報告会を実施した。会場は文化センターさざ波とし、講師は発掘調査担当者である林学芸員が担当した。町内だけでなく近隣市町からの参加者もあり、49名の参加があった。遺跡の発掘調査報告会はここ4年間で3回目であるが、いずれも50名程の参加があり、地域の方々に遺跡に興味を持ってもらう機会として定着してきていると考えられる。

5. まとめと課題

(1) 竪穴住居群の北側平坦地の様相

トレンチ7は、竪穴住居群の北側平坦地における遺物の分布状況を確認するために設定した。調査の結果、縄文文化期の遺物が出土したことにより、竪穴住居群の北側平坦地の北部まで当時の人々の活動範囲が広がっていたことが確認された。昨年度の調査で北側平坦地の東部・西部で石器製作や被熱礫に関わる何らかの作業が行なわれた痕跡が確認されたことと併せ、縄文文化の活動範囲がより広範囲に及んでいることがわかる結果となった。

遺跡の時期に注目すると、今年度の調査でも明確に擦文文化期の遺物だと断定できるものは確認されなかった。道埋文の測量調査の成果により、竪穴住居跡530か所の内、その約60%にあたる362か所が平面形が方形であることがわかり、擦文文化期の竪穴住居跡であると考えられている。そのため、擦文文化期においても竪穴住居群の北側平坦地には何らかの活動が行なわれていたと考えられる。今後の調査では擦文文化期の活動痕跡を確認することが、シブノツナイ竪穴住居跡で営まれた当時の生活を明らかにするために必要なことである。また、擦文文化期の活動痕跡が見つからない場合、それがどのような要因によるものなのか考えていく必要がある。

トレンチ8は、昭和41年の測量調査で記録されていた竪穴住居跡の内、昨年までの道埋文の調査で確認されなかった「未確認竪穴」の有無を確認するために設定した。有無を確認する必要がある未確認竪穴は史跡内全体で15か所あるが、今回の調査で確認を試みたのは竪穴住居群と北側平坦地の境の4か所である。結果として、竪穴住居跡は確認できなかった。ただし、確認するために調査を行った範囲は1×5mという限られたものでしかなかったため、竪穴住居跡が無いと断定するには今後範囲を広げて確認作業を行う必要がある。

その他の成果としてはテフラが確認されたことが挙げられる。遺跡内でのテフラの存在は、昭和41年の調査でも238号・318号の両竪穴でも確認されていた。このことは概要報告書（大場1966）の記載からわかる。第1層とされる黒色土の下、第2層として「白色火山灰層で約2cm」という記載があり、今回の調査で確認された層と同一のものと考えられる。今後、このテフラの年代を明らかにすることは遺跡の成り立ちを考えるうえで非常に有効であるため、化学分析を行い調査の参考としていくことが重要である。

(2) 遺跡の遺存状況

検土杖調査によって搬入土が確認された場所を確認し、昨年調査成果と合わせることでより正確な造成範囲を把握することができた。史跡内で造成されたと考えられる範囲は、竪穴住居群北側の平坦地の内、西側の3分の1程度となる。つまり、竪穴住居群西側に広がる低湿部が、本来は現状より約80m東側まで広がっており、より竪穴住居跡と近距離にあったと推測できる。竪穴住居群が形成された当時の旧地形をより具体的に想定でき

るようになった成果は大きいと考えられる。

旧地形を考える際に考慮する必要があるのは搬入土だけではない。竪穴住居群が確認されている舌状台地の北側は砂丘列に接している。そのため、竪穴住居群形成時の砂丘列及び海岸線の状況を知ることは、遺跡の成り立ちやその性格を知るうえで欠かせない。今後の調査で明らかにする必要がある。

旧地形をより正確に把握するためには今回の検土杖調査の成果以外にも、国土地理院による過去の航空写真とこれまでの調査成果の比較を行うことも有効であると考えられる。これについては来年度以降の課題であり、それらの情報を集め精査したうえで、将来的には遺跡を正しく理解するための景観復元が必要である。

(3) 今後の調査課題

今年度の調査に関連する今後の課題は前述したが、昨年まで調査を行っていた道埋文の調査報告書において、今後継続的な調査が行なわれる場合の将来的な課題が挙げられていた。それらを次に示し再確認すると共に、本年の調査成果と照らし合わせてみる。

- ① 竪穴各形状の時期確認
- ② 東西範囲間で竪穴分布状況が相違する要因の確認
- ③ 竪穴建替の特徴（規則性）と竪穴群形成過程の復元
- ④ 北側平坦地の埋没竪穴の有無と擦文文化期の利用状況の確認
- ⑤ 大型竪穴の性格の確認
- ⑥ 昭和41年記録の未確認竪穴の所在・残存状況の確認調査

今年度の調査と関連するのは④と⑥である。④はトレンチ7の成果と関連する。北側平坦地で埋没竪穴も擦文文化期の遺構・遺物が確認されなかったが、トレンチ一つの成果で結論付けるのは時期尚早であり、今後も継続的にトレンチ調査を行い情報を集める必要がある。⑥はトレンチ8の成果と関連する。未確認竪穴は確認されなかったが、調査した範囲が狭いため今後調査範囲を広げながら判断していく必要がある。

以上のように、部分的に明らかになってきたことはあるが、シブノツナイ竪穴住居跡で確認すべきことはまだまだ残されているのが現状である。史跡の保全と活用を進めるため、今後も継続的な調査を行い史跡の内容確認を進めていくことが不可欠である。

引用・参考文献

報告書等

- 網走市立郷土博物館 1990『網走市立郷土博物館収蔵考古資料目録第4集「オホーツク沿岸の遺跡」』
財団法人北海道埋蔵文化財センター 2005『遠軽町栄野1遺跡・新野上2遺跡』北埋調報213
公益財団法人北海道埋蔵文化財センター 2002『湧別町シブノツナイ2遺跡』北埋調報316
北海道立埋蔵文化財センター 2015『重要遺跡確認調査報告書第10集』
2016『重要遺跡確認調査報告書第11集』
2017『重要遺跡確認調査報告書第12集』
2018『重要遺跡確認調査報告書第13集』
- 北海道大学文学部附属北方文化研究施設 1967『北海道紋別郡湧別町湧別遺跡調査概要』
青柳文吉編 1995『北方民族博物館調査報告 湧別町川西遺跡』北海道立北方民族博物館
大場利夫 1965『湧別町古代史』『湧別町史』湧別町
1966『湧別町シブノツナイ遺跡調査概要』湧別町教育委員会
木村英明編 1973『湧別市川遺跡』湧別市川遺跡調査団・湧別町教育委員会
米村喜男衛 1961『川西遺跡調査報告』網走郷土博物館シリーズ 網走市立郷土博物館
米村喜男衛 1981『北海道紋別郡湧別町川西遺跡』『北方郷土・民族誌』3北海道出版企画センター
171-181頁
米村哲英 1963『北海道紋別郡湧別町字川西シブノツナイ遺跡調査概報』湧別町
米村哲英編 1985『湧別市川II遺跡』湧別町教育委員会
福田正宏編 2015『日本列島北辺域における新石器／縄文化のプロセスに関する考古学的研究—湧別市川遺跡の研究—』東京大学大学院新領域創成科学研究科

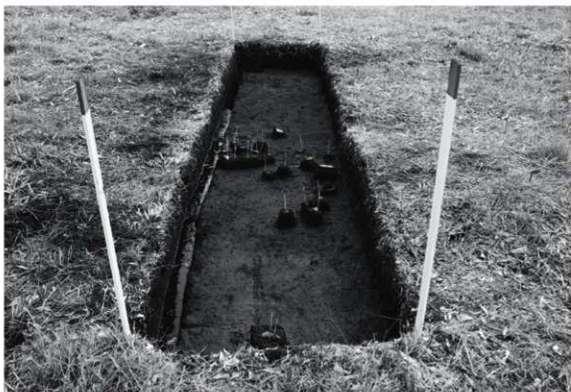
論文等

- 安部三郎 1958『シュブノツナイ式土器（櫛目文土器）について』『アイヌ・モシリ』2北海道学芸大
学考古学研究会 12-15頁
大沼忠春編 2004『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館
熊木俊明 2018『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』北海道出版企画センター
小嶋尚・野上道男・小野有五・平川一臣編 2003『日本の地形 2 北海道』東京大学出版会
児玉作左衛門・大場利夫 1958『湧別遺跡の発掘について』『北方文化研究報告』13 53-114頁
長尾捨一 1962『5万分の1地質図幅説明書「中湧別」』北海道開発庁
中田裕香 2016『大場利夫と壑穴群』『北海道考古学』第52輯 69-78頁
町田洋・新井房夫編 2003『新編 火山灰アトラス - 日本列島とその周辺』東京大学出版会

図版 1



1 トレンチ7・8 遠景（手前トレンチ8・奥トレンチ7）南から



2 トレンチ7 II層遺物出土状況 北から

図版 2



1 トレンチ7 II層遺物出土状況 北西から



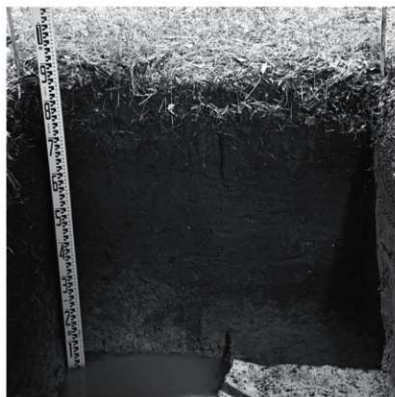
2 トレンチ7 作業風景 北から



3 トレンチ7 完掘 南から



1 トレンチ7 土層断面 西壁



2 トレンチ7 土層断面 南壁

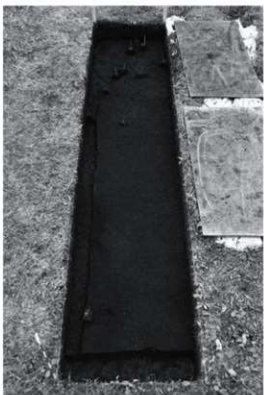
図版 4



1 トレンチ8 a層遺物出土状況 東から



2 トレンチ8 b層検出面 東から



3 トレンチ8 II層遺物出土状況 東から



4 トレンチ8 作業風景 東から



5 トレンチ8 作業風景 北東から



1 トレンチ8 II層完掘 北東から

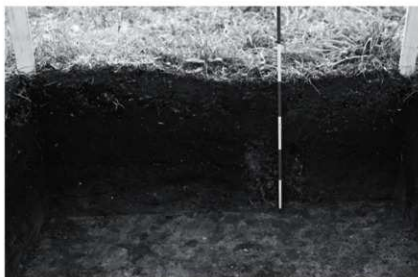


2 トレンチ8 土層断面と隣接する竪穴住居跡の窺み 北から

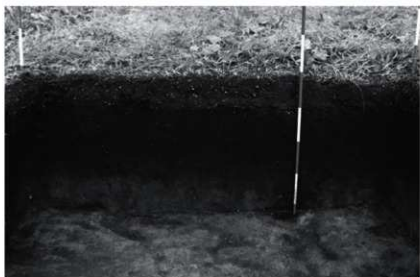
図版6



1 トレンチ8
土層断面
南壁中央付近



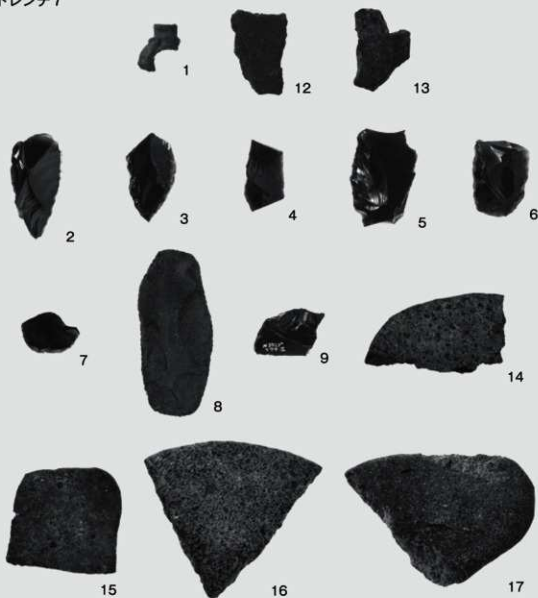
2 トレンチ8
土層断面 西壁



2 トレンチ8
土層断面 東壁

図版7

トレンチ7



トレンチ8



発掘調査出土遺物

図版 8



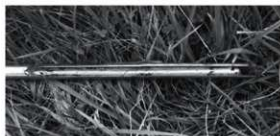
1 トレンチ7 埋め戻し完了 東から



2 トレンチ8 埋め戻し完了 東から



3 検土杖調査風景



4 検土杖調査 搬入土確認



5 検土杖調査 基本土層確認



6 発掘調査の見学対応（湧別高校）
竪穴住居跡を囲んで



7 発掘調査の見学対応（湧別高校）
トレンチ8の見学

報告書抄録

ふりがな	ほっかいどうしていしせき しぶのつないたてあなじゅうきよと はつくつちようさほうこく							
書名	北海道指定史跡 シブノツナイ竪穴住居跡 発掘調査報告1							
副書名	史跡内容確認のための調査							
巻次								
シリーズ名	湧別町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	林 勇介							
編集機関	湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館 JRY・郷土館							
所在地	〒099-6325 北海道紋別郡湧別町北兵村一区588番地 TEL01586-2-3000							
発行年月日	西暦 2019年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		日本測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
シブノツナイ 竪穴住居群 (道指定史跡 シブノツナイ 竪穴住居跡)	北海道紋別郡 湧別町川西 499-1・2, 502-1・ 2, 503, 714, 717 ~ 720, 722-1 ~ 3, 930	15598	I-21-35	44° 14' 40.14"	143° 34' 32.56"	2018. 7.10 ~ .11.1	12.42 ㎡	史跡保護のため の詳細分布 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
湧別町 シブノツナイ 竪穴住居群 (北海道指定史 跡シブノツナイ 竪穴住居跡)	集落跡	統縄文文化期 擦文文化期	窪みで残る竪穴住居跡が 530か所。 竪穴は4~7m規模の方形 を呈するものが主体である が、10m前後の大型のもの も15か所見られる。		統縄文文化期 (宇津内Ⅱb式土器) 削器・搔器		トレンチ調査 検土杖調査	

湧別町文化財調査報告書第1集

北海道指定史跡
シブノツナイ堅穴住居跡
発掘調査報告1

史跡内容確認のための調査

発行年月日 2019年3月20日

編集・発行 湧別町教育委員会

〒099-6325北海道紋別郡湧別町北兵村一区588

湧別町ふるさと館 JRY・郷土館

電話 (01586)2-3000

印刷 北湧印刷

北海道紋別郡湧別町緑町99番地

